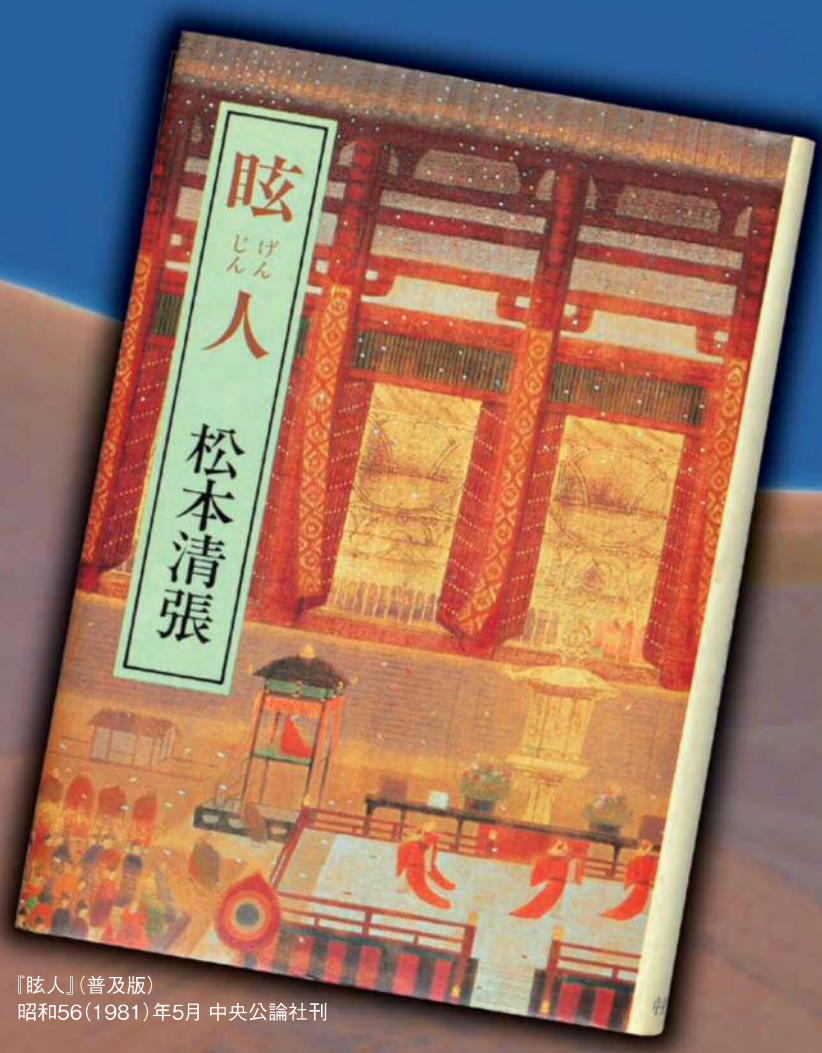
MATSUMOTO SEICHO MEMORIAL MUSEUM

松本清張記念館

◆館報◆
2014.12
第47号

遊び女は
白皙碧眼の胡娘である。
いま、その路地に
日本の留学僧が一人、
うろうろしている。



『眩人』(普及版)
昭和56(1981)年5月 中央公論社刊

「眩人」は、昭和52(1977)年2月から昭和55(1980)年9月まで、「中央公論」に連載された。

現在入手できる本　『松本清張全集』第51巻 文藝春秋

目次

●山口恵以子 講演会……2
●特別企画展『眩人 ― 松本清張と東西文化交流』……5
●展示品紹介……6
●点描 作品の舞台を訪ねて……6
●友の会活動報告……7
●トピックス……8

作品紹介

遣唐留学僧の玄昉は帰国を目前にして、火祆教(ゾロアスター教)の儀式を体験する。波於麻酒を飲んで、自分が胡人の秘薬で治した公主(皇族の女性)の寵愛を得て、天下を動かす幻夢を見る。その経験から則天武后に関心を抱き、女帝が一介の薬売り、薛懐義を僧侶にして寵愛したことを知る。

天平七(七三五)年、玄昉は雑伎に長けた波斯人、康許生を連れて帰国した。第二部は、李密翳と改名した許生の回想である。

玄昉は、聖武天皇の生母で皇后の姉である宮子大夫人が、出産以来の重い「幽憂」で長年人に会わないという話を吉備真備から聞く。玄昉は李密翳が調合した丹薬と波於麻酒を大夫人に飲ませて奇跡的に平癒させた。これを足がかりに天皇、皇后の信頼を得た玄昉は、薛懐義を手本に、橘諸兄の新政権の中枢に深く食い込んでいく。さらに天皇を動かして、国分寺の建立と大仏造立を推進するが、金丹(強壮薬)の服用しすぎで、天皇には乱心の兆しが現れる。紫香楽宮の造営を機に橘諸兄の信任も僧行基に移り、〈光明子〉の名を献じた光明皇后の寵愛も藤原仲麻呂に移って、絶頂の玄昉にも翳りが忍びよる。

玄昉の破滅に身の危険を感じた李密翳は、新羅船に便乗して長安に戻った。筑紫観世音寺に左遷された玄昉は、落慶供養の日に黒雲に連れ去られ、後日その首が奈良興福寺南大門に落ちていたという噂が長安に伝わってくる。

唐都長安と天平の奈良を背景に大規模な歴史と人物群像を描く、企図壮大な歴史小説である。

(学芸担当主任　中川 里志)

山口恵以子 講演会

○平成二十六年八月二日(土)
○北九州市立男女共同参画センター・ムーブ ○参加者 約二五〇名

「書く」という一本の糸に導かれて

「食堂のおばちゃん」で有名になった松本清張賞作家、山口恵以子さん。そこに至るまでの長い道のりは、一本の糸に導かれてのことでした。ユーモア溢れる経験談に、大いに励まされます！

皆さまこんにちは、山口恵以子です。何を隠そう私はこれまで九州にも北海道にも行ったことがありません。本日が人生初の九州、小倉です。私の運命を変えてくれた松本清張賞、その作家ゆかりの講演会ということで、誠に不思議なご縁を感じております。

父・母の薫陶を受けて…

私は、昭和三三年に東京都江戸川区に生まれました。実家は祖父の代から理髪鋏を作る工場を経営し、祖父は明治生まれの非常に頑固な職人で、名人と言われた人でした。「剪刀齋山弥（せんとうさいやまや）」という、理髪鋏のトップブランドだったそうです。

父が「酒は水で割るな」と遺言を遺したものですから、私は醸造一本、日本酒とワインをこよなく愛するようになりました（笑）。

母は県立高等女学校時代に、声楽家を目指していましたが、扁桃腺を取ったら声が不安定になってしまい諦めたそうです。私がいい歳をして「脚本家になりたい」「小説家になりたい」と言えたのも母のおかげです。母の絵本の読み聞かせは、登場人物ごとに勝手にテーマ曲を作って歌ったり、効果音を入れたり、一人ラジオドラマみたいでしたので面白がって一生懸命聴きました。忘れられないのが「人魚姫」です。「王子様を殺すことができなくて足元から泡になって海に消えていきました」という描写を、切々と語るもんですから、私は子供心に「愛ってなんて残酷なんだろう」とワンワン泣いてしまいました。

諦めなかった漫画家への道

小学校に上がる頃、興味は絵本から少女漫画に移ります。当時、「少女フレンド」、「マーガレット」が創刊されて間もない時代でした。

この頃から夢は「漫画家になること」でした。でも、典型的な文学少女だった母の影響で、漫画のほかに「レベッカ」、「風と共に去りぬ」、後々はツルゲーネフ、チェーホフといったロシア文学も読むようになりました。

大学三年くらいの時に、卒業までに新人賞を取って少女漫画家としてデビューしようと決めました。せっせと応募したけど佳作にも入らない。どうしてだろうと、四年の夏休みが終わった頃に漫画雑誌の編集部に持って行って見てもらいました。

副編集長が見てくれて、「話は面白いけど、絵が下手で話にならない。線の段階で下手だ」と言われました。「我々が求めているのは少女の感性であって、理想を言えば一四、五歳で絵の上手い女の子がいたらそれがベストです。ストーリーはいくらでも編集者が助けてあげられるけど絵は誰も助けてくれないから、とにかく絵がうまくないと困る」と。そしてはっきり「見込みがないからやめたほうがいいですよ」と言われました。普通だったらここで諦めるんでしょうけど、私は「ふざけんなよ！」と思いました。

その時母に言われたのが「あなたが自分に才能がないと思って諦めるなら構わない。でも、もう歳だからとか、誰それさんは結婚したからとか、ちゃんとした会社に就職しないと世間体が悪いとか、自分以外の理由で諦めると一生後悔することになる」。これで道を誤ったという見方もできますけど、今でもこの時の母の言葉に感謝しています。

そういうわけで、大学卒業までに少女漫画家としてデビューする夢は脆くも潰え去ったので知り合いに頼んで、宝石と毛皮の輸入会社に就職させてもらいました。でもこれは単なるつなぎであってデビューしたら辞めるんだと、ずっと思っておりました。そこは三年で倒産し、今度は派遣で働くことになりました。しばらく経つと、私はまた焦り始めました。いったん就職してしまうと描く時間が取れず、描かないうちにどんどん下手になっていきました。

脚本家という新たな目標

あれは三三歳になろうとしていた時でした、派遣と派遣の間でブラブラしておりまして、すこし太ってきたのでダイエットのためにフラメンコ教室を探そうと「ケイコとマナブ」という雑誌を買ってパッと広げたたん「松竹シナリオ研究所・研修生募集」とあるのを見て「これだ！」と思いました。

なんで漫画から急にシナリオかといいますと、二〇代の頃、山田太一さんの「早春スケッチブック」というテレビドラマに、すごく感動したんです。当時は優れたドラマがいくつも放送された時期で、山田太一さんの「ふぞろいの林檎たち」、向田邦子さんの「阿修羅のごとく」「あ・うん」などを観て、脚本に興味を持ちました。

今思うと、私の中には「物語を作りたい」という思いが連綿として続いており、漫画という形がダメになった時も次の形を探していたのだと思います。そうして巡りあったのが「松竹シナリオ研究所」でした。入ったその日から、私の夢は漫画家から脚本家になりました。

「蟹工船」のプロットライター時代

二年間の研修を終えて卒業した後、二時間ドラマを制作しているプロダクションを紹介してもらいプロットを書くようになりました。プロットというのはドラマ用の筋書きです。家に例えると、基礎工事がプロットライターで、上モノを立てるのがシナリオライター、内装外装を施して家を完成させるのが演出家あるいは監督の役目です。

私の夢は最初、漫画家でした。それから脚本家になりました。プロットを書いてお金を貰ったその時に、はっきりと目標に変わりました。ドアは開かれ、向こうにはまっすぐ一本道が続き、そこを歩けば脚本家になれると信じて疑いませんでした。でもそこからが本当に、本当に遠い

道のりでした。

プロットというのは、原稿用紙で三〇～五〇枚ですが、書き直しを加えると総数三百～五百枚書きます。それなのに、手数料は一本につき額面五万手取り四万五千円、ひどいプロダクションは額面三万手取り二万七千円です。二ヶ月も三ヶ月も書き直しで拘束されるうえ、お金もすぐもらえるわけではありません。ひどいところは半年、一年待たされ、もっとひどいところは踏み倒されます。まさに、デスクワークの「蟹工船」。「無理へんに拳骨と書いて兄弟子と読ませる」のが相撲の世界なら、「無理へんに搾取と書いてプロデューサーと読ませる」のがドラマの世界です。

脚本家になるには道が二つあります。一つはコンクールで賞をとること、もう一つはプロットを書いて「脚本を書いてみない？」と声をかけてもらうのを待つ道です。私は入賞できなかったのでプロットの仕事をするしかありませんでした。

その後一五年の間には脚本を書くチャンスも何度かあったのですが、とうとう脚本家にはなれないまま四〇代半ばになってしまいました。

天職との出会い「食堂のおばちゃん」になる

二〇〇二年の九月、やはり派遣と派遣の間に求人欄を見ておりましたら、「丸の内新聞協会食堂調理補助パート募集」とありました。時間午前六時～一一時、時給千五百円、交通費全額支給、賞与と有給休暇あり。「スナックよりいいじゃん！」と思いましたね。翌日面接に行き、運良く採用になりました。

私は子供の頃から台所で母の手伝いをしていましたし、元来すごく食いしん坊なので、調理補助の仕事に全く抵抗はありませんでした。それに拘束時間が短く、午後から始まるプロダクションの企画会議に間に合うのが決め手でした。採用の時に「うちはパートの方も六〇歳定年です」と言われ、とてもホッとしたことを覚えております。

働き始めてみると、これは天職じゃないかなと思いました。食堂の仕事は、一切、嘘やごまかしがないんです。生まれて初めて、働く喜びに目覚めた感じでした。

ところが、それまで若々しくて元気だった母が、父が亡くなってからは急に坂を転がり落ちるように老い衰えて、三年目には全く別の人になってしまいました。私を守ってくれる頼りになる人から、私が守ってあげないといけない人に変わってしまったんです。これは本当に辛かったです。毎朝三時半に起きて台所を片付けて、猫に餌をあげて、食器も洗って出かけるんですけど、生まれて初めての肉体労働で疲れ切って帰ってくると、家の中が嵐が通り過ぎた後みたいなのです。母はどうなったんだろうと、かなり困惑しました。でも、一年半くらい経った頃にもう諦めました。母と娘だと思っているから辛いんだ、「お嬢様」と「ばあや」でいこうと。母が「わがままお嬢様」で、私が「ばあや」です。「お嬢様、またこんな粗相をなさって！ばあや悲しゅうございます!!」と思っていると結構耐えられるので、それに決めたと。そのうち母も、坂から踊り場くらいになったので、少し救われました。

「恒産なき者は恒心なし」

ちょうどその頃、サスペンスドラマの脚本を書けることになったんですが、事情があって流れてしまいます。その時、たまたまプロデューサーと私が、同い年だということに気がついたんですね。ということは、ほかのプロデューサーもほとんど同じだな、もう脚本家の芽はないなと思いました。誰だって新人脚本家でデビューさせるなら、ちょっとでも若くて伸び代のある人を使いたいはずです。三〇代で書ける人がたくさんいるのに、四〇半ばの私は使ってもらえないだろう。

私は脚本家を目指して、プロットというハードルを一本一本越えながら前に進んでいるつもりだったのに、実際はこまねずみがカラカラ糸車を回しているように、同じ場所で足踏みしていた――そういう自分の姿が見えた瞬間でした。

やっぱりこれは食堂の仕事のおかげです。経済的に安定してくると、人間余裕が出てきます。余裕をもって周りを見渡してみたら、自分の立場が見えたんです。でも、私の中にはまだ物語を作りたいという気持ちが続いていました。脚本家はダメだけど、小説家ならいけるだろうと考えました。

「恒産なきものは恒心なし」という孟子の言葉があります。きちんとした仕事、収入がない者は、安定した精神を保つことができないという意味です。安定した精神がなければ、小説、まして長編小説は書けません。私に『月下上海』を書かせてくれたのは、食堂であると今でも思っております。

二〇〇七年、四九歳の時、出版プロデューサーの紹介で、ついに私は『邪剣始末』という時代小説文庫でデビューすることができました。でも本が全く売れなかったんです。

小説家にとって作品は子供と同じです。私が受賞歴のない無名の新人でなかったら、もう少し世間の耳目を集めて読んでもらえたのにと、本当に申し訳ない気持ちでした。それが『月下上海』の受賞をきっかけに、再刊してシリーズ化してくれることになりました。賞をいただいたことも嬉しいんですけど、こういうことも同じくらい嬉しいです。不甲斐ない親を持ったばっかりに可哀想な目にあった子供たちに、やっと日の目をみせてやることができました。

書けない――更年期うつを乗り越えて

『邪剣始末』が売れなくて、次頑張りましょうねと言っていたその矢先、私は更年期うつ病になってしまいました。

うつの時には、気分が落ち込むことも辛かったんですが、もっと辛かったのは書けなくなったことです。私の場合は、書き始めると登場人物が勝手にお芝居を始めて、思いもよらなかった方向へ連れて行ってくれます。そうしないと話が転がらなくて面白くない。でも、うつのときは、登場人物がストーリーのあやつり人形みたいになって、考えた通りに始まって考えた通りに終わってしまうんです。だから書きながらホントつまんないな、と思いました。このまま一生書けないで終わってしまうのかなと思うと、絶望的な気持ちでした。

ちょうどその頃、「新鷹会（しんようかい）」という小説の勉強会に入りました。長谷川伸によって昭和一五年に発足したんですが、山手樹一郎、山岡荘八、村上元三とか、戦後は池波正太郎、平岩弓枝とそうそうたるメンバーです。

私の場合、症状が軽かったんだと思います。二年で快方に向かい、徐々に書けるようになりました。二〇一〇年のG・W（ゴールデンウィーク）に『イングリ』のもとになる短編を書いたんですが、その時に登場人物が勝手にお芝居を始めてくれまして、ああこれで完全に治ったなと書いてる途中から嬉しくてたまりませんでした。書き終わったときは人生バラ色という感じでした。

『月下上海』誕生の頃

そのころ「新鷹会」の仲間三人で、個人的な小説の勉強会を始めました。『月下上海』のアイデアが生まれたのも、その会がきっかけでした。

二〇一一年の秋くらいに、新聞のテレビ欄で「上海の伯爵夫人」というタイトルを目にし、ロマンチックな題名だなと思っていたら、なぜか戦前の上海で優雅な貴婦人のような女性と冷酷そうな男性が会話でバトルをしているシーンが浮かんできたんです。それからは次々と二人のシーンが浮かんできて、あの貴婦人はどんな人なんだろう、あの二人はどういう関係なのかな、なんて思っていました。

一二月の初め頃、勉強会の後に飲み会をやっていましたら、昔考えた小説のネタを急に思い出しました。戦前の東京で芸術家同士が結婚するんですが、とても不幸な結末を迎え

てしまうというお話です。あ、そうだ、あのヒロインが、貴婦人の若い頃なんだ、ということに気がつきました。その瞬間にストーリーの八割ができ、二人を相手に「私こういう話を書こうと思っているの！」と話し始めた、あの時の興奮を今でも覚えております。

それから三ヶ月で、おおよそのストーリーを書きました。プロットライターをした経験から、すぐ書き始めたら失敗すると思いました。書き出すまでに三ヶ月待ちました。熟成、発酵してくるのを待つ間に、当時を舞台にした小説を読んだりイメージを膨らませて、一ヶ月ちょっとで『月下上海』を書き上げました。書き上げた時は、全身脱力、エクトプラズムが抜けた状態になってしまいました。

ところが、やっと力作を書き上げたと思ったのに、食堂のほうが大変なことになりました。私の前任者の主任が七月二〇日付で休職することになったんです。ただ、神様っているかもしれないと思ったのは、その時期と『月下上海』を書いている時期が、きれいに分かれて一日も重ならなかったんです。よくよく考えますと、私がうつ病を発症した時期も、母が坂を転がり落ち動揺している時期ではなくて、一応小康状態になって落ち着いてから始まりましたので、悪いことが二つは重ならなかったんです。ある意味、私って悪運が強いなと思います。

松本清張賞　受賞のその後

そして昨年四月にめでたく松本清張賞が決定したのですが、受賞会見といっても極めて地味なものです。私の場合も、翌日新聞に三行のベタ記事があっただけですし、「松本清張賞なんて賞、あったの？」とよく言われました。

ところが、東京新聞社会部の記者の方が食堂のおばちゃんが文学賞を取ったのは珍しいからと、取材にみえたんですね。後日、社会面に「食堂のおばちゃんは作家」っていう写真入りの大きな記事になって出ました。それからちょっと各方面で話題になりまして、テレビ番組が取材に来ました。一回テレビに出たとたん、ありとあらゆるところから出演依頼がありました。当時は、午後一時に食堂の仕事を終わってから、食堂で取材二件と写真撮影、それから文藝春秋の本社に移動して取材二件と写真撮影とか、そういうスケジュールがざらにありました。名前が出たことで、新聞や雑誌からは、コラムやエッセイの依頼がかなりありました。「オール讀物」でも去年の半年だけで短篇を三篇書かせていただきました。だから結構忙しかったんです。

でも、受賞後の第一の課題は、「受賞後第一作を書くこと」でした。去年六月「次の長編どうしますか？」と訊かれました。その時に提案したのが、今回の『あなたも眠れない』です。このヒロインとは、実はもう二五年来の付き合いです。このヒロインは絶対いけるなと思っていたので、うつ病が治りかけた時、彼女だけを抜き出した短編を作りまして、それを「新鷹会」で読んでもらいました。みなさん、眠りを奪うというアイデアは面白い、このヒロインもなかなか良い、だけど話は取って付けたようですね、と大変的を射たことをおっしゃいました。

担当編集者にあらすじを書いて提出すると、「話は面白いんだけど銀座の超高級クラブというのが今やもう完全に時代遅れです」と言われました。あれこれ考え困っていたら「いっそバブル期にしたらどうですか」と提案してくれました。考えてみたら私が原形を書いたのもその時代でした。回り回って落ち着くところに落ち着いたという気がしております。『あなたも眠れない』、現在好評発売中です（笑）。

連綿と続く、物語を「書く」ということ

去年の暮れ、原稿の注文が多く舞い込みまして、食堂に、お給料半分でいいから一〇時半で上がらせてくれませんか、と頼んだところ、「勤務時間が四時間半だとパート待遇に戻すしかない、正社員の主任がいないのは困るので別の人を雇う必要が生じる、パートでこのまま働くことも構わないが、四月までに結論を出すように」と言われました。

定年まであと四年、最後までいたいなと思ったんです。でも、会社も経営が苦しい状況の中、余剰人員になった私が居座っていたらマズイなと思いました。それに、力がある長編が書けるのは七〇歳くらいまでだと思っているんです。そしたらあと一四年しかない、もう一年も無駄にはできない。だからこの際辞めようと決心しました。でも、食堂は私の恩人です。会社は辞めましたけど、ご縁は一生続くと思っています。

食堂の仕事が天職なら、小説は生きがいですね。職業というのはお給料をもらって初めて成立しますが、私は全然お金にならなくても小説を書いてましたし、持ち出ししてでも書いてました。今までそうやってきたので、これからも、どんな苦しいことがあっても書き続ける自信があります。そして書き続ける私の後ろ姿を、松本清張賞が見守ってくれるはずだと思っております。

振り返ると、私の人生には物語を作る、「書く」という糸が一本だけ垂れていたのだと思います。漫画、脚本、小説と形は違いますけど、毎回挫折感なく移行できたのは、全部が物語という糸で繋がっていたからです。それをたぐりながらずっと歩いて来たら、最後の方で松本清張賞に出会ったのだと思っております。「書く」という一本の糸に導かれて、ここまで歩んできた人生でした。

私の座右の銘

私、週刊誌で人生相談をやっているんです。タイトルは「相談すんな！」（笑）。いろんなお悩みについて共通して思うのが、「かっこつけないで頑張りましょう」ということです。人間、どんなにかっこつけても、自分以上のものにも、自分以外のものにもなれません。だったら最初から地べたに足をつけて等身大の自分で一〇〇％努力したらいいんじゃないかなと私は思います。

ただ、どんなに頑張っても、及ばないことはありますし、叶わない夢もあります。でも一〇〇％力を出し切って頑張った人は、諦めることができるんです。諦めというのは一種の救いです。無用なプレッシャーや執着からの開放です。諦めて気が楽になれば、新しい風景が見えてくることがあります。ところが、かっこつけて頑張らなかった人、俺は出来ないんじゃない本気出してないだけだ、と言って一生本気出さなかった人は、諦めることができません。そして一生引きずり、後悔します。だから、かっこつけないで頑張りましょう。

それと、細かいことはあまり気にしないほうがいい。細かいことって、本人はすごくこだわっていても、周りから見るとどうでもいいことなんですよ。人生は短いので、どうでもいいことばかり気にしているうちにすぐ終わっちゃいます。

最後に、私の座右の銘を三つ紹介させていただいて、終わりたいと思います。

一つ、「かっこつけないで頑張る」。
二つ、「細かいことは気にするな」。
三つ、「酒は水で割るな」。

ご清聴ありがとうございました。

特別企画展

『眩人――松本清張と東西文化交流』

『眩人』は唐都長安と天平の奈良を背景に、大規模な歴史と、留学僧玄昉や光明皇后などの人物群像を描く、企図壮大な歴史小説である。また、清張古代史テーマの一つ、《ペルシア・ゾロアスター教（徒）の日本伝来》（『火の路』）に象徴される、東西文化交流の問題を展開した作品でもある。本企画展では、美術鑑賞の楽しみも味わえるように、清張所蔵のガンダーラ仏と平山郁夫画伯の『眩人』挿絵の原画を展示する。

■開催期間
平成27年1月10日（土）～3月31日（火）

■場所
松本清張記念館地階　企画展示室

■入場料　※常設展示観覧料に含む
一　般　500円　中高生　300円
小学生　200円

Ⅰ 唐都長安から奈良の都へ
――壮大な『眩人』の世界

第一部は日本人（玄昉）の、第二部は胡人（李密翳）の、異国見聞録というプロットと語りの転換の見事さの上に、自由奔放な着想力と大きな構想力で壮大華麗に構築・建立した、まさに盧舎那大仏のような大作である。

『遣唐船』高木卓著
昭和21年11月20日、あづみ書房

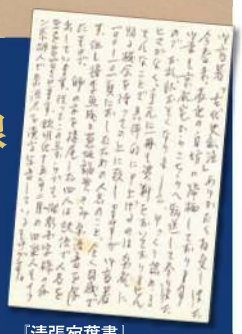
大慈恩寺前で座り込んで写真を撮る清張（西安）
写真提供：講談社・撮影：斎藤和欣

「中央公論」（『眩人』第25回）
昭和54年8月、中央公論社

Ⅱ 〈眩〉の世界を視通す史眼

「眩人」は、《筆者の新しい推定》が作品の骨となり血肉となって歴史をよみがえらせ、その中で《想像力》を縦横無尽にはたらかせて、登場人物を活き活きと活躍させる、歴史小説である。

礎石の写真を撮る清張（西安）
写真提供：講談社・撮影：斎藤和欣


『清張宛葉書』
昭和56年10月22日付、差出人は京都大学名誉教授伊藤義教氏。『古代史私注』で清張が述べた伎楽面制作者の「人名のこと、全く同感」と伝えている。

平山郁夫原画は、平山郁夫シルクロード美術館所蔵

直筆『古代史カード』

直筆『研究（創作）ノート』

Ⅲ 遥かなる東西文化交流
――〈光明〉は西から

「火の路」の中にすでに「眩人」のことが書かれ、経典の〈「光明」という名称がすでにゾロアスター的〉などという記述には、東西文化交流に関する研究の跡がみられる。この問題は、生涯をかけて考究が続けられた。

直筆原稿「クレオソートと玉碗」
昭和52年1月6日、「週刊文春」

直筆原稿「古代史私注」
昭和51年2月～55年12月、「本」

イスラム寺院・清真寺で（西安）
写真提供：講談社・撮影：斎藤和欣

Ⅳ 『眩人』と北九州
――こころに残る風景

『眩人』には、北部九州地域にある川や古寺などが出てくる。それらは玄昉にまつわる歴史的事件の現場であるが、奇しくも松本清張が子どものころ遊んだ板櫃川であり、父に連れられ参った筑紫観世音寺であった。

板櫃川（北九州市小倉北区）
玄昉を除こうとした藤原広嗣の乱の戦場跡。

「国宝のある古寺再訪 福岡県太宰府町 観世音寺梵鐘」
左上の写真は、玄昉の墓。
昭和50年5月、「文藝春秋デラックス」

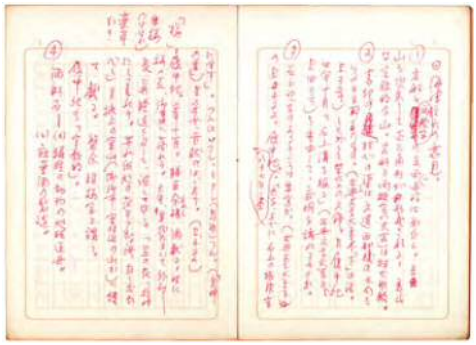
『火の路』創作ノート

一月十日から開催される企画展で紹介している『眩人』の原点は、古代史ミステリー『火の路』（原題「火の回路」昭和四十八年六月十六日～翌年十月十三日、「朝日新聞」）である。両作に一貫するテーマは、《ペルシア・ゾロアスター教（徒）の日本伝来》に象徴される東西文化交流の問題だが、これは生涯をかけて考究が続けられた。

『火の路』創作のために、松本清張は単身イランにまで取材旅行を敢行した。今回の『眩人』展ではそのときの『取材ノート』を展示紹介している。同作の創作過程を垣間見ることのできる資料がもう一つある。常設展示室1に展示中の『**「火の回路」創作ノート**』である。原稿用紙タイプのノートに、「酒場談義」、「海津信六の意見」（同十章「かくれた波」、同十二章「影の暗示」に該当）、「海津信六の後からの手紙（通子宛）」、「新考察」などの見出しでくくられた、着想や構想のメモが書き込まれている。

展示中のノートは「海津信六の意見」のページで、びっしり赤字で書かれている。真っ赤なページが気になるが、まずは海津の意見を見てみよう。

①は、「岩船と両槻宮の東西一直線は面白し。」とある。作中では、高須通子の第一論文でその一直線のことを読み、信六が〈面白かったですね〉と感想を述べる。次いで「香山（ママ）を頂点として正三角形が形成される」とあるのは、〈もし両槻宮も香久山の方向にむかっていたとすると、香久山を北の頂点にして、両槻宮、益田岩船と、底辺の長い三角形をつくる〉との信六の意見になる。最後に「岩船＝両槻宮（天宮）は拝火神殿」とあるが、これは、第二論文で変更する両槻宮は『多武峰にあるのではなく益田岩船そのもの』との新しい推考を、このときすでに得ていたことを示しているのかも知れない。



最後の④には、「酒船石＝（イ）犠牲の動物の処理道具。（ロ）麻薬酒の製造。」と、酒船石の用途案が並べられている。作中では（イ）案は書かれず、代わりに〈銅のインゴットをつくる石型〉ではないかと若い頃に考えたと信六は話す。そして、（ロ）の「麻薬酒の製造」案は通子の口を通して、酒が〈円形の沈殿所に入ってきたところを、（中略）薬草をつくって混入し、薬酒を造る〉と語られる。第一論文では〈「製造されたもの」の実体には、まだ推定がつかない〉とぼかされていたのが、ここで〈薬酒〉と明確にされるのである。

このように『創作ノート』は、〈古代日本にもゾロアスター教の影響が入っているのではないか〉という着想が、研究と思索を通してどのように構想としてまとめられ、作中『論文』に結実したか、その過程の一端を読みとることのできる貴重な資料である。

（学芸担当主任　中川 里志）

点描

作品の舞台を訪ねて

「眩人（げんじん）」――玄昉（げんぼう）という人 ② 観世音寺（かんぜおんじ）

玄昉は、天平一七（七四五）年、造営に当るため「観世音寺」（福岡県太宰府市）へ遣わされ、その翌年に怪死した。寺には玄昉の墓とされる石塔がある。

母である斉明天皇追善のため天智天皇が建立を発願したとされ、天平宝字五（七六一）年には、東大寺のほか下野（しもつけ）薬師寺（栃木県下野市）とともに〈いわゆる天下の三戒壇（※1）の一つが設けられたことによって、九州第一の権威をもった〉（※2）寺として知られた。日本最古といわれる梵鐘と、平安期以降に造られた多くの仏像を遺す。

同寺の古仏に関する考察に、玄昉の功績を記したものがある。〈寺号の由来になったと考えられる〉講堂の観世音菩薩像は、〈観世音菩薩の中でも不空羂索観音（ふくうけんさくかんのん）だったと考えられて〉おり、〈この仏は八世紀前半に唐からもたらされ〉、〈強大な現世利益的呪術力をそなえた、最新最有力の仏として、奈良時代に期待された存在〉であったが、〈この不空羂索観音の信仰を本格的に日本にもたらし、その展開に大きな影響を及ぼしたと考えられる者こそが、玄昉だった〉（※2）という。清張もこの寺をよく訪れていた。

去年の冬、観世音寺に三十二、三年ぶりに行った。わたしがこの寺をはじめて見たのは十五、六のときで、父親につれられて行った。それから戦争が激しくなるまで十回近くは行っている。（中略）創建当時の鐘楼は、講堂のうしろにあった。（中略）この鐘を初めてわたしに見せた父親は、菅原道真（みちざね）の「ただ鐘声を聞く」の詩を口ずさんだ。（中略）

この鐘楼から、新しくできた玄昉の五輪の石塔が近い。前は、こんな立派なものではなく、古びた貧弱な石が茂みの中にあって、玄昉の墓と称した。（中略）

周知のように玄昉は、橘諸兄（もろえ）のもとで吉備真備（きびのまきび）とともに政界に勢力をふるった。藤原広嗣の反乱は、玄昉らを除くのをスローガンにしたが、失敗した。しかし、諸兄の政敵藤原仲麿の進出で、玄昉は観世音寺に貶（おと）された。この寺の鐘も墓も、失意の人に因縁がある。

（「国宝のある古寺再訪　福岡県太宰府町観世音寺梵鐘」（※3）より）

〈失意の人〉玄昉は、後作「眩人」で、新たな人格を身にまとうこととなる。これについては後号で書く。なお、石塔は〈奈良時代よりも六百年も新しい南北朝時代のものであり、後の世の人々が玄昉の霊を弔うために造られたものか、偶然に存在したその石塔に、玄昉の説話を付与したものと考えられ〉ている（※2）。この地で最期を迎えた人を偲ぶ縁として護られ、自らは沈黙を守ったまま、今に伝わる。次号へ続く。

玄昉の墓［写真提供：太宰府市］

（※1）僧尼に戒律を授けるために設ける壇。石などで築く。日本では、七五四（天平勝宝六）年、鑑真が東大寺大仏殿前に設置したのに始まる。（『広辞苑』）

（※2）『観世音寺』二〇〇六年　九州歴史資料館編

（※3）『文藝春秋デラックス　日本の国宝一〇〇選』一九七五年　所収

（加地 尚子）

国際共同研究に参加しています

科学研究費助成による国際共同研究「現代東アジア文学史」(代表：東京大学・藤井省三教授／2013年4月～2017年3月)に、当館から柳原暁子専門学芸員が参加しています。9月下旬に台湾大学で開催されたワークショップでは、松本清張に関する研究発表を行いました。

これを機に、松本清張の作品や研究が広く世界へ発信され、「現代東アジア文学史」における松本清張の位置が確かなものになるよう取り組んでいきます。

2015年秋には松本清張記念館で公開ワークショップを開催する予定です。ご期待ください。

台湾大学・台湾文学研究所にて。ワークショップ参加メンバー。

柳原暁子学芸員(右)による発表風景

友の会 活動報告

● 平成26年度年次総会・懇親会

8月2日(土)　参加者 29名
北九州市立男女共同参画センター・ムーブ 5階

山口恵以子講演会の後、平成26年度友の会年次総会を開催しました。前年度の事業報告・決算、役員選任、新年度の事業計画・予算の審議が行われ、拍手をもって承認されました。懇親会は、総会終了後に会場を松本清張記念館地階ホールに移して行いました。山口恵以子様も特別参加され、会員向けにサイン会をしていただくなど、皆様大変感激していました。小林慎也会長や藤井康栄館長の挨拶をはじめ、参加者のスピーチなども行われ、和やかな懇親会となりました。

● 清張サロン

平成26年度の第1回清張サロンは、特別企画展「伯爵夫人ミツコ 激動のヨーロッパに咲いた華――松本清張『暗い血の旋舞』」をテーマに担当の学芸員を講師として開催しました。会議室での講義の後、講師と一緒に企画展を見学しました。第2回は、台湾で開催された国際共同研究に参加した記念館学芸員を講師として、台湾出張の報告と研究テーマ「松本清張と水村美苗の『嵐が丘』体験」についてお話を伺いました。いずれのサロンも、貴重な話を聞くことができ、有意義な清張サロンとなりました。

第1回　9月26日(金)　参加者 27名　記念館 地階会議室
- テーマ：特別企画展「伯爵夫人ミツコ 激動のヨーロッパに咲いた華―松本清張『暗い血の旋舞』」
- 講師：小野芳美氏(記念館・専門学芸員)

第2回　10月30日(木)　参加者 24名　記念館 地階会議室
- テーマ：国際共同研究報告「松本清張と水村美苗の『嵐が丘』体験」
- 講師：柳原暁子氏(記念館・専門学芸員)

● 文学散歩「小説の舞台と美術館等を巡る旅」

11月6日(木)　参加者 39名
宗像市鐘崎→福岡市博物館→石橋美術館→青木繁旧居

今回は、「渡された場面」等で登場する宗像市鐘崎・織幡神社付近、金印で有名な福岡市博物館、久留米市にある石橋美術館・青木繁旧居を巡りました。鐘崎周辺では、現地でどうにか観光バスが通れるような道を探って鐘崎漁港に着き、織幡神社がある小山を見ることができました。福岡市博物館を駆け足で見学した後、昼食をとって、石橋美術館に向かいました。石橋美術館では、職員の方から、清張さんが訪れた際には熱心に収蔵品をご覧になっていたとのお話もありました。青木繁旧居では、保存会会長から大変分かりやすい説明をしていただきました。盛りだくさんの行程であったため、もう少し時間がほしいところでしたが、参加者の皆様から「良かった」「次回も楽しみ」といった声をいただきました。

●友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集●

松本清張記念館友の会は8月1日～翌年7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、『友の会だより』の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。

年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしています。

友の会入会のお申し込みは、松本清張記念館友の会事務局まで

TEL. 093-582-2761

『松本清張研究』販売のお知らせ

『松本清張研究』(年1回発行)の最新号は、本年3月に刊行した第15号「特集 清張と故郷[北九州]」です。創刊号から最新号まで、館内ミュージアムショップのほか、下記の書店や通信販売でもご購入いただけます。

各号の内容は、当館ホームページをご覧ください。

■販売書店

【北九州】

- 積文館書店 ブックセンタークエスト　小倉本店

【東　京】

- 紀伊國屋書店　新宿本店
- 三省堂書店　神保町本店
- 東京堂　神田神保町店
- 八重洲ブックセンター　八重洲本店

■通信販売

記念館まで電話かFAXでお申込みください。

後日、郵便振替用紙(代金＋送料)をお送りします。

『松本清張研究』の送付は、振込を確認した後となりますので、ご了承ください。

第16回 松本清張研究奨励事業 入選企画決定

平石 淑子氏

尾崎 名津子氏

「松本清張研究奨励事業」も16回目を迎えました。第一線で活躍される入選者も増え、清張研究のさらなる発展が期待されます。今回は入選が2点、新しく斬新な視点の歴史研究とオーソドックスながら堅実な文学研究です。選考委員会による厳正な審査の結果、次のとおり入選者が決まりました。

研究奨励事業入選者

企画名 『松本清張の見た関東州
— 平石氏人資料を手がかりとして』

入選者 平石 淑子(日本女子大学教授)

企画名 『松本清張とラオス
— ベトナム戦争の記述をめぐる研究』

入選者 尾崎 名津子(日本大学・早稲田大学非常勤講師)

第17回 松本清張研究奨励事業募集

募集要項

対　象　①松本清張の作品や人物を研究する活動
②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人または団体も可。

内　容　入選者(団体)に130万円を上限とする研究奨励金を支給します。

応募方法　今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的にわかる企画書、予算書、参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成27年3月31日までに提出してください。

※詳しくは、ホームページをご覧になるか、記念館までお問い合わせください。

●編集後記●　「点描」欄で先行紹介中の『眩人』、この作品をとりあげた企画展がいよいよ始まります。清張古代史の大山嶺の一つ、東西文化交流論。平山郁夫画伯の挿画とともに、壮大華麗な時空の旅へとお出かけください。新しい年が、皆様にとってよい年となりますように。(N.K)

イラスト:山藤　章二

編集・発行
松本清張記念館
〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093(582)2761
FAX 093(562)2303
http://www.kid.ne.jp/seicho
制作　(株)エディックス

●開館時間　午前9:30～午後6:00(入館は午後5:30まで)
●休館日　年末(12月29日～12月31日)
●観覧料　一般／500円(400円)　中・高生／300円(240円)
小学生／200円(160円)　(　)は30人以上の団体
●アクセス　JR: 小倉駅から徒歩15分　西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からはバスをご利用いただくと便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)
車: 北九州都市高速、大手町ランプより5分